

福井支部ニュース

2023年度 第1号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆ 2023年度第1回 JSA 福井支部幹事会の概要報告 (山根 清志)
- ◆ 本の紹介 『カオスなSDGs グルっと回せばうんこ色』 (小野 一)
- ◆ 報告 軍拡 NO! 女たちの会・茨城 設立集会に参加して (森 透)
- ◆ 時事評論 岸田政権とデジタル後進国の実相 (その1) (小倉 久和)

2023年度 JSA 福井支部 第1回幹事会の概要報告

6月20日(火) 18:00時から、Zoomによるオンライン方式で JSA 福井支部第1回幹事会が開催された。事前に知らされていた議題は、幹事会における各幹事の役割分担の決定、その他、であった。

1. 幹事会における各幹事の役割分担

前事務局長から、前年度の分担をそのままを継続するという提案があり、幹事会としてそれを承認した。なお、JSA 北陸地区から全国科学者会議幹事として山本富士夫氏が選出されている。

2. その他

時間に余裕があり、以下の諸議題について、意見交換した。

(1) 全国第54回定期大会について

日本学術会議についての決議の説明が、山本代表幹事からあった。

役員選考 WG で、いくつかの本部人事が難航したことが報告された。

総務財政部長、国際部長、JJS 編集委員長

(2) 今期の支部例会について

1) 福井県内に3カ所の原子力発電所を構える関西電力が、6月12日に県に対して示した案は、高浜原発に貯蔵される使用済み核燃料のごく一部(全体の5%)を20年代後半にフランスに運んで再処理するという事で、そしてそれを、「県外に搬出されるという意味で県外の間貯蔵と同等の意義がある」と主張した。これは全くのペテンである。これについて、小野一氏にオンラインによる市民公開型の支部例会で講演してもらう。10~11月くらいを目処にやる方向で検討。

2) 来年の北陸シンポを福井で開催するのはどうか?

山本代表幹事：その方向で、北陸地区会議で提案・検討してみる

3) 島崎邦彦元原子力規制委員会委員長代理の近著についての読書会

島崎邦彦著「3.11 大津波の対策を邪魔した男たち」青志社 2023.4

4) 樋口英明元福井地方裁判所裁判長のドキュメンタリー映画「原発をとめた裁判長」の観賞会と意見交換会

(福井支部で開催した樋口講演会のビデオもある。)

5) 熊本地震と原発、断層の問題

6) 勝山の学校ですすむ統廃合問題をテーマに、関係者に報告してもらう

(3) 「福井支部結成50周年記念特大号」発行実行委員会の開催日程

原発問題についての寄稿を予定：山本富士夫、山本雅彦、小野一、他

(4) 「福井の科学者」について

・年2号発行か、年1号発行か、要検討?

・特集を組むかたちでの発行にならざるを得ない?

(5) 会計と会員拡大について

伊藤会計担当幹事から、6/19現在の残高、会費未納者数・未納額を報告、会費未納者へは今月中に個別に手紙で督促、2023年後期分会費請求は7/10以降に発送予定。最後に、現在の会員数、などの報告があった。

次回の第2回幹事会(奇数月)は、山本事務局長の活動上の都合もあり、7/10(月) 18:00~ということになった。

出席幹事は9名、終了時刻は20:10であった。

(山根 清志)

【本の紹介】『カオスなSDGs グルっと回せばうんこ色』

酒井敏 集英社新書 2023

おそらくこの書を手にした人の多くは、奇想天外なタイトル（特に副題）に度肝を抜かれるだろう。プロローグには次の一節がある。

「京大が掲げてきた「自由の学風」とは、そういう逸脱を奨励するものだといえるでしょう。誰も考えなかった「アホ」なことを始めても、京大では「そんな研究が何の役に立つんだ」とはなどとは言われませんでした。むしろ「そりゃあオモロいなあ」と褒められる。逆に、誰でも思いつくようなキレイに整った研究は「オモロない」とそっぽを向かれてしまうのです」。その上で、「あらかじめ「ゴール」を設定されたSDGsは、まさに敷かれたレールの上を走るようなもの」でオモロない。秩序が整いすぎて自由がない。だから「積極的にそのレールに乗りたいたとは思わない」のだという。

著者は、元京都大学教授（現任は静岡県立大学副学長）で地球物理学が専門。「京大変人講座」で話題を集めた名物教授。古き良き時代の京大の自由な学風が失われつつあるのは、嘆かわしい限りだが、SDGsがらみの仕事を持ちかけられて、突っぱねようかとも思ったが、最終的に引き受けたのは、学生のことがちょっと心配になったからだという。「若い学生は「純粹」なところがあるがゆえに、いったん「これが正義だ！」と思い込むと、そちらの方向に暴走しがち。しかし学生という立場で第一に取り組むべきは「運動」ではなく「学問」です。今はやりの温暖化懐疑論、と思われるかもしれないがそうでない。SDGsも方向性としては間違っていない。この壮大なキレイごと「ぼちぼち」つき合っていくにはどうしたらよいか考えるのが、本書を通しての課題である（23頁）。

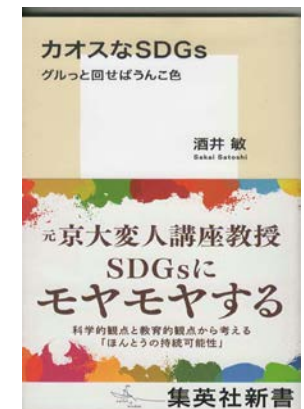
SDGsは、2015年に国連総会で採択された（達成目標年度は2030年）。誰一人取り残さない社会を目指す17の目標には、狭義の環境問題に限らないテーマも含まれる。『SDGs（持続可能な開発目標）』（中公新書、2020年）を著した蟹江憲史の解説によれば、入り口が17ある部屋のようなもので、どれか興味のあることから関与していけばよい。このような総花的な目標設定のゆえに、トレードオフ（相互矛盾）関係が起こ

らないのかというのは、まっとうな懸念である。

例えば、「安全な水とトイレを世界中に」（目標の6番目）は、ある意味、SDGsの矛盾を象徴する（189頁）。非衛生的な生活環境を強いられる人のことを思えば、これは優先度の高い目標だが、先進国のトイレが世界中で普及すれば環境負荷はいかほどになるのか。また、本書でも扱いの大きいプラゴミ問題に関していえば、国連や欧州議会の脱プラ積極姿勢の背後には、もうプラゴミを中国に押しつけられなくなったという事情もあるのではないかと。（日本）政府は補助金を使って地方自治体にプラゴミの分別回収をさせるより、自らの焼却技術を世界に広めることを考えたほうがよいと思います（66頁）というのは、驚きかもしれない。世間一般でいわれている「常識」を鵜呑みにすることなく、現実を知るのが必要ということだろう。

主として地球温暖化問題を扱う第3～4章にも、「地球はサステナブルでなくても困らない」「温暖化より氷期になるほうが心配」「無計画だからこそうまくいくスケールフリーな世界」などの刺激的な小見出しが並び、著者はカオス論や複雑系科学の専門家ではなく、この方面の議論がかなり大雑把なことは自ら認める。しかし「科学者には、あらゆる可能性を吟味する慎重さが求められる反面、時には大胆さも必要」なのである（159頁）。サステナブルだが必然的に格差を生み出すのが資本主義経済なら、SDGsには、社会の暴走を防ぐリミッターとしての役割が期待できる。自由度が低いほどカオスの暴れ方は激しくなるので、グローバルな枠組みで全体のベクトルを揃えるのではなく、（プラゴミにせよ地球温暖化にせよ）「それぞれがローカルな事情に合わせてやっていく」（165頁）。SDGsそのものを分別（フンベツ）をもって分別（フンベツ）する（46頁）。著者のいう、キレイごとと「ぼちぼち」つき合うとはそういうことではないのか。

モヤモヤがとれてスカッとした、との読後感を抱く人もいるだろう。昨今話題の書『「意識高い系」資本主義が民主主義を減ぼす』（カール・



ローズ著、東洋経済新報社、2023 年）にも通じるところがある。とはいえ、環境論議の盛り上がりには水を差すような議論は、保守派や御用学者に都合よく解釈されてしまわないか。もちろんその危険はある。だが私には、むしろ、情報アップデートが不十分なまま反対運動を続けるだけの環境派に贈る耳の痛い忠告のように思えた。「法哲学者が法律を守ることに疑問を抱いたりするのが、学問というものです。SDGs も、まっすぐに受け入れて行動するだけでは学問になりません。」

(小野 一)

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

◆ジャーナル評論：「日本の科学者」「福井の科学者」の評論

◆時事評論、意見・見解

◆活動報告・経歴報告・事例紹介

◆行事案内、会員への案内・お知らせ

その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。 yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp
ogura@u-fukui.ac.jp

【報告】「軍拡 NO！女たちの会・茨城 設立集会 — 雨宮処凛 講演会」に参加して

5 月 20 日（土）につくば市で開催された「軍拡 NO！女たちの会・茨城設立集会」に妻とお友達の 3 名で参加してきました。13 時 30 分から 16 時までの長時間で、内容が濃くて大変刺激的な集会でした。女たちの会ですが、私も含めて男性も結構参加していました。会場があまり広くはないのですが、50 名以上の参加と ZOOM 参加もあるので、多分 100 名位は参加されていたのではないかと思います。私は、雨宮処凛さんの講演があり、初めてリアルな講演を聴けるというので、最前席でかぶりつきでしっかり聴くことができました。

「軍拡 NO！女たちの会」は熊本、大阪、北海道で立ち上がり、茨城もそれに続く形で準備されてきました。つくばの新婦人を始め、茨城県の民

主的な女性の方々が準備をされたのですが、集会でいただいた資料には呼びかけ人 25 人の方々のお名前と肩書きが書かれていました。主催者代表は、「つくば・大学名誉教授」の女性の方で最初に熱い挨拶をされ、25 人は県内にお住まいで、水戸・土浦・取手・守谷・牛久・つくば等の方々でした。

最初に、雨宮処凛さんが土浦の呼びかけ人の方との対談という形式で、ご自分の活動をパワーポイントで報告されました（「コロナ禍、困窮者支援の現場から、『軍拡より生活』の重要性について語る」）。雨宮さんの書かれたものはいくつか読んでいましたが、滔々と流れるように語る熱き雨宮さんには敬服しました。当日持参された最新刊『学校では教えてくれない生活保護』（河出書房新社、2023 年 1 月）を紹介されましたが、外国の事例（韓国とドイツ）の先進的な取組みは非常に感銘しました。早速書籍を購入し、著者サインを私と妻の連名でお願いしました。受け取る時に「握手！！」をさせていただきました！！

雨宮さんの講演の後は、三上智恵監督の「沖縄、再び戦場（いくさば）へ（仮題）」のスピノフ作品の上映会（45 分）がありました。完成の 2024 年に向けて現在ドキュメンタリーを撮影しているとのこと。完成品の一部を本日事前に上映してくれました。沖縄の宮古島やいくつかの島々に軍備配置される現実抗議する島民の闘いの姿がありました。本当に厳しい闘いが現実に行っていることを改めて映像で観ることができました。非常に重い内容でした。

最後に、＜「軍拡 NO！女たちの会・茨城」の設立に当って「決意表明」＞が司会者によって読み上げられ、会場の大きな拍手で承認されました。2 時間半という長さの集会でしたが、内容が熱く、深く、重く、考えさせる集いでした。今後、参加した 3 人でできるところから活動を始めたいと考えているところです。

(森 透)



【時事評論】岸田政権とデジタル後進性の実相（その1）

◆鮎侍（ふなぎむらい）

日本にも生成 AI のチャット GPT が上陸し、岸田文雄首相が米国開発企業の CEO を招いて懇談し前のめりの対応をした。AI のスタートアップ起業家との懇談会で、起業家がマスクを付けて話すとその声がリアルタイムに岸田氏の声に変換されて聞こえる実演に「ああ～ すごい！」と心から感心していた。岸田氏は、米 Time 誌の表紙を飾った「日本を真の軍事大国にする」とのタイトル付きで自慢顔の写真が評判になったが、内心が真っすぐ表情に出る。バイデン氏が支持者の集会で得々と説明したように、彼の言うまま岸田政権は国会も国民も無視して軍事予算を GDP2%に倍増、拳拳に長身のバイデン氏に抱かれた満悦顔の写真が世界に報道された。

岸田氏を「鮎侍」と名付けたのは浜矩子氏である。浜氏は、安倍政権の政策を「アホノミクス」、次の菅政権は「スカノミクス」、そして現岸田政権は「アホダノミクス」と名付けた。岸田氏本人には、歌舞伎の仮名手本忠臣蔵で吉良が浅野を罵倒した言葉「鮎侍」、と名付けた。鮎は、周りからつつかれると向きを変えてはぶつかりちょろちょろ動き回るので、江戸時代には（大物の鯉と比べて）定見を持たない軽輩の小物、という嘲りの言葉だそうだ。それにしても岸田氏が総理就任以来くるくる発言を替える様子は、可笑しいくらいに浜氏の名付けがピッタリする。

◆技術後進国

かつて（1980 年代前後）は日本がデジタル分野を筆頭に多くの産業分野で世界をけん引していた。1980 年代後半に、1970 年代から第 2 次産業の空洞化が始まっていた米国の政府・産業界の圧力に屈し、デジタル分野をはじめとして多くの基幹産業分野で前線から撤退し後進国（発展途上国の意ではなく後ろから進む国）になり下がった。技術後進国では、米国から用無しになった武器を爆買いしても維持できず、もちろん輸出は及ばず、防衛産業支援法で国費を注ぎ込む状態だ。

◆マイナカードのトラブルは、何十年も前から繰り返している問題と同根

デジタル庁をはじめ総務省、厚労省、内閣府など関係省庁は、紙の医療保険証廃止・マイナ保険証一本化の法案が成立するまで、マイナンバーカード（マイナカード）を巡るトラブルを隠蔽した。マスメディアが持ち上

げていた岸田政権の支持率はマイナカードのトラブル噴出で下がり、あの読売新聞が社説でマイナ保険証の凍結を主張するまでになった。

マイナカードを巡るトラブルはもちろん初めてではない。COVID-19 パンデミックが始まった 2020 年初め、ドイツ在住の日本人がドイツ政府に申請したら 3 日後に支援金が振り込まれたなどという報道に安倍政権が焦せり、全国民 1 人 10 万円の給付を決定した。給付作業は自治体任せで、自治体の担当部署は給付対象者抽出から振込確認までの段取りと作業を短期間で行うことになったのだが、当然ながら迅速にはいかない自治体もあった。そして TV などでも多くの識者・コメンテータが「マイナカードが普及していないからだ」と主張、官邸もカードによる給付申請を推奨した。ところが、カードでの申請窓口が大混乱となって余計に人手と時間が掛かり、カードによる給付申請を中止した自治体もあった。すると識者たちは「だから IT 後進国なのだ」と自治体を非難し、官邸も「自治体は情報処理能力の向上を」、「国民はカードを取得し使い方にもっと慣れるべきだ」などと混乱の責任を自治体と国民に転嫁した。しかし、混乱の責任は IT のイロハをわきまえない無責任な「識者」たちと「政権・幹部官僚」にある。マイナカードは各国民「個人」に対応するが、給付は「世帯」に対して行われた。給付が間違ったり重複したりするのを防ぐ個人と世帯を連携する IT システムが無い、という無知に基づく政策の不備が原因である。

今次のマイナカードトラブルは、住基ネットでもさらに前世期末の「消えた年金」でも繰り返す指摘された問題と同根である。しかも 1980 年代には認識されていた課題でもあった。これらの問題の根っこは、IT の基本を理解していない、しようとししない、指導的政官財トップの後進性と無責任性にある。2016 年開始のマイナカード配布は、2020 年 3 月に 15% だった。マイナポイントを付けたら（大手販売店の顧客囲込み戦略！）、この 2023 年春には 70%に跳ね上がった。「この国民にしてこの政権あり」か「この政権にしてこの国民あり」か分からないが、デジタル後進国からの脱却は「教育」をめぐる腰を据えた闘いになりそうだ。

（小倉 久和）

＜＜編集後記＞＞

第 53 期幹事会による福井支部ニュースの第 1 号をお届けします。今期も引き続いて編集・発行を担当します。寄稿をお願いします。（OG）